

幼児の不適切発話とあいまい発話に対する発話修正の発達

— ごっこ遊びにおける相互交渉に着目して —

飯島典子

(聖和学園短期大学)

問題と目的

乳幼児の遊びは一般的に、乳児期の感覚運動遊びから幼児期における象徴遊びへ、そして児童期におけるルール遊びへと発達する (Piaget, 1967)。このうち象徴遊びは見立てを用いて遊びを展開する遊びであり、発達心理学における研究の多くがこの遊びに焦点をあててきている。この象徴遊びは、ひとりで行う場合はふり遊び、2人以上で見立てを共有しあって遊びを展開する場合はごっこ遊びと区別される。ごっこ遊びにおいて複数の幼児が遊びに参加し見立てを共有しながら「ごっこ」のエピソードをつくりあげるには、参加者間の相互交渉の発達が不可欠である (高橋, 1996)。とりわけ、ごっこ遊びに参加している幼児はそれぞれが展開のプランを持っているため、遊びを展開する過程で個々のプランにズレが生じてしまうことも多い (上山, 1991; 佐藤, 1999)。このズレはいざござの原因ともなり (Kinoshita, Saito & Matsunaga, 1993; 倉持, 1992; 岡崎, 2008; 斉藤, 1986; 田中・阿南, 2008)、その傾向は年齢発達にともない高まる (斉藤, 1986) ことから、ごっこ遊びの中で幼児はこのズレの調整に時間を費やすことが明らかになっている (上山, 1991)。

ズレを調整する手段として発話修正がある。発話修正はごっこ遊びに限らず日常の会話においても生じるが、ごっこ遊びにおいてとりわけ重要となる。この発話修正は会話における発話中の誤解、見込み違い、不明な点や不適切な点を修正するために行われる。発話修正には話し手が自分の間違いを自分で修正する自己開始修復 (self-initiation of repair) と、聞き手による他者開始修復 (other initiation of repair) の2つがある (Garvey, 1987; Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)。このうち聞き手の他者開始修復には、相手のメッセージの不適切な箇所を正しく言い直してしまう「言い直し」や、相手の発言の問題点や自分が理解できない点を指摘する「明確化要求」がある。この「言い直し」や「明確化要求」による発話修正を通じて相手のプランを理解することができるため、ごっこ遊びの展開において発話修正は重要な役割を

もつと思われる。

しかしながらこれまで幼児の発話修正の検討は、主に大人からの発話修正に幼児が適切に応答できるか否かといった点に着目されてきた (Gallagher, 1981; Tomasello, Farrar, & Dines, 1984)。そのため、子ども同士の相互交渉において幼児はどのような状況のときに発話修正をするのかといったことについては十分な検討がなされていない。大人は子どもと遊ぶ際に子どものプランを推測し、それに合わせようとする。しかし、子ども同士の場合はどちらか一方の遊びに合わせるのではなく、お互いのプランのズレを修正しながら遊びを展開する必要もある。したがって、幼児と一緒に遊ぶ仲間と遊びのプランやイメージを共有し、ごっこ遊びを展開させる上で発話修正をどのように使用し相互交渉を行っているのか検討することで、幼児の相互交渉の発達の変化や特徴を明らかにすることができると思う。

しかしながら、自然場面のごっこ遊びにおける発話修正の検討は2つの点で難しいと思われる。ひとつには、発話修正は相手の発話に対する聞き手の認識にもとづいて行われる点である。すなわち、発話修正の「言い直し」は聞き手が不適切だと認識した場合に、「明確化要求」は聞き手が情報不足だと認識した場合に行われる。そのため、自然場面において幼児が発話修正をしなかった場合に、それが幼児の認識の問題なのか発話修正の実行の問題なのかを明らかにすることは難しいと考えられる。2つには、発話修正は発話以外の情報に依存して実行される点である。一般に会話では聞き手は話し手の意図を理解するために、文脈情報などを利用し話し手が述べた発話の字義どおりの意味以上のことを推論している (Grice, 1975)。したがって、たとえ伝達情報が不足していたとしても、発話以外の手がかり情報があれば発話修正は実行されない。しかし、自然場面のごっこ遊びにおける相互交渉からは幼児がどのような文脈や状況情報を手がかりに相手の発話を理解しているのかを捉えることが難しいと考えられる。

これらの検討上の難しさを踏まえると、幼児の発話修正を詳細に検討するためには実験場面において認識内容

と手がかり情報を統制する必要があると思われる。実験場面では課題内容を幼児が発話修正に向かうように設定することで、幼児の発話修正の実行と不実行の2つの側面から検討することができると思われる。より具体的には認識内容の統制は不適切な、または情報の不足するエピソードを幼児に伝え、それに対する望ましい応答を選択させることで検討できると考えられる(選択課題)。その際、提示するエピソードにはごっこ遊びの会話で主に話される「見立て」と「設定」(Garvey,1980)を用いることで、ごっこ遊びと発話修正との関連を明らかにすることができると思われる。次に、手がかり情報の統制については、発話以外の文脈情報のある場合とない場合の幼児の発話修正の実行の違いをみることで検討できると考えられる(やりとり課題)。これらの課題を異なる年齢で実施することで、発話修正の発達の変化とごっこ遊びの展開との関連を捉えることができると思われる。

以上のことから、本研究では幼児のごっこ遊びの展開に重要だと思われる発話修正に着目し以下の仮説を検証することを目的とする。

仮説1. 選択課題では年齢が高くなるほど発話修正による応答の割合が増加する。

仮説2. やりとり課題では年齢が高いほど手がかり情報のある場合に発話修正は実行されない。

仮説3. やりとり課題では年齢が高いほど手がかり情報のない場合に発話修正は実行される。

仮説1については次のように考えられる。すなわち、幼児は年齢発達にともない相手の発話の不適切な箇所や不十分な箇所を適切に認識できるようになる。そのため、年長児ほど発話修正ができるようになると考えられる。また、仮説2、3は次のように考えられる。すなわち、幼児は年齢発達にともない相手の発話のどこにあいまいさがあるのかを言語化することができるようになるだけでなく(鈴木・福田,1987)、推論による理解が高まる。したがって年長児ほど発話以外の文脈からの手がかり情報を利用できるため、手がかり情報のある場合には発話修正を実行せず(仮説2)、手がかり情報のない場合には発話修正を実行すると思われる(仮説3)。

方 法

対象児

S市内の保育所において調査を依頼し、承諾を得た上で年少児34名(男児16名、女児18名、平均4歳3か月、SD5.6か月)、年中児51名(男児28名、女児23名、平均5歳2か月、SD5.3か月)、年長児46名(男児25名、女児21名、平均6歳2か月、SD3.8か月)、合計131名(男児

69名、女児62名)を対象とした。このうち、年少12名、年中12名、年長14名は事前調査を行っている。データ処理上、問題がみられなかったことから分析対象とした。

調査期間

2006年8月～2007年1月に行った。

調査期間が長期にわたっている理由は実験方法がパソコンによって進められたことによるものだった。年少児クラスの3歳はパソコンによる応答の操作方法を十分に理解できない幼児が多くいた。そのため、年少児のデータ収集は4歳の誕生日を迎えた子どもが多くなる12月に実施した。

手続き

保育所の一室において個別法によって実施した。実施はやりとり課題の次に選択課題の順で行われた。このうち選択課題はノートパソコン(12.1インチ)のモニターに刺激図を表示して行われた。刺激図の提示順序はプログラミングされていたため、カウンターバランスをとることはなかった。

課題の所要時間はやりとり課題、選択課題を通じ15分程度だった。

課題

本研究では、ごっこ遊び場面に関するエピソードに対し対象児が発話修正による応答選択肢を選択することを通じて発話修正の応答を検討する選択課題と、対象児に調査者が直接指示を出すことで発話修正の応答を検討するやりとり課題の2つを実施した。

1. 選択課題の課題構成と実施方法

(1) 選択課題の課題構成

Table1には選択課題の課題構成が示されている。選択課題はごっこ遊び場面の相互交渉における伝達が不適切な場合(不適切条件)と情報不足な場合(あいまい条件)の2つの条件によって構成されていた。具体的な問題は、練習問題、不適切条件である不適切発話問題、あいまい条件であるあいまい発話問題の3つからなり、不適切発話問題およびあいまい発話問題はそれぞれ、見立てに関するエピソードと設定に関するエピソードの2つのエピソードで構成されていた。

Figure1には、選択課題におけるPC画面の導入教示図と応答選択肢図が示されている。課題の実施にあたっては、刺激図をPCの画面に表示して行った。また、刺激図およびエピソードには条件設定以外に指示語対象を推論できるような手がかりは含まれていなかった。

Table 1 選択課題の構成

問題	問題番号	設問内容と期待応答	エピソードの種類	応答選択肢(上段)と応答内容(下段)		
				期待応答	共通	共通
練習	1	日常場面の社会的ルール発話の理解	仲間入り／物の貸し借り	社会的ルール	無関連	無関連
	ルールに相応しい発話			場面に関係の無い発話		
不適切発話	3	ごっこ遊び場面の不適切発話による伝達の修正	見立て／設定	言い直し修正	物	進行
	4			不適切箇所を言い直し	画面上の物についての言及	不適切な発話を発展させる
あいまい発話	5	ごっこ遊び場面の不明確発話(指示語)による伝達の明確化	見立て／設定	明確化修正	物	進行
	6			指示語の明確化	画面上の物についての言及	不明確な発話を発展させる



Figure 1 PC刺激図の例（不適切発話問題）

(2) 練習問題

練習問題は対象児が課題の意図とパソコン操作を理解しているかを確認するために行った。具体的には、対象児に日常場面で典型的な社会的ルールのエピソード(例; 仲間入りする場面のエピソード)を聞かせ、この場面で適切な発話は提示された3つの選択肢のうちどれかをたずね、対象児が期待応答を選択するかどうかをみた。

(3) 不適切発話問題

不適切発話問題では、主人公がお友だち(対象児が発言を予測する子)にごっこ遊びのイメージ伝達をしている場面において、主人公の発話の一部分に不適切発話が含まれているエピソードを対象児に聞かせた。そして、お友だちは主人公に対しどのようなことを言うとよいと思うか3つの選択肢から1つを選択させ、対象児が期待応答を選択するかどうかをみた。3つの選択肢は、不適切な箇所を適切な表現に言い直す発話修正の「言い直し修正」と、画面に表示している物や人物について言及する「物」と、不適切な内容と関連して遊びを発展させる「進行」が用いられた。

Table2には不適切発話の問題例が示されている。これより、不適切発話問題ではまず、「かなこちゃん」(主人公)が「お友達」(黄色い服のお友達)に「2人ともお母さんになろう」と不適切な提案をしている。そして、主人公(かなこちゃん)の不適切発話への「お友達」の応答として、「2人だけで遊ぶの? (物)」「お母さんはエプロンするの? (進行)」「お母さんは1人だけじゃないの? (言い直し修正)」の3つの応答選択肢を提示し、対象児が「言い直し修正」(お母さんは1人だけじゃないの?)を選択するかどうかを検討した。

Table 2 不適切発話問題の教示例（女の子用）

PC 画面 (Figure1)		教示内容
導入教示		これからおかしなお話をします。この黄色い服のお友達はどんなことを聞くとよいと思うか3枚のカードから選んでください。 かなこちゃんはおうちごっこをすることにしました。かなこちゃんは、 <u>2人ともお母さん</u> になろうと、お友達にいいました。 かなこちゃんのお話が少し変だったので、この黄色い服のお友達はかなこちゃんにもう少し聞いてみることにしました。次の3つのうち、どれがいいと思いますか？
選択肢教示	物	2人だけで遊ぶの？
	進行	お母さんはエプロンするの？
	言い直し修正	お母さんは1人だけじゃないの？

不適切発話部

Table 3 あいまい発話問題の教示例（女兒用）

PC 画面		教示内容
導入教示		これからおかしなお話をします。この黄色い服のお友達はどんなことを聞くとよいと思うか3枚のカードから選んでください。 きみちゃんはお家ごっこをすることにしました。きみちゃんは、この人形は <u>それ</u> をしていることにしようと、お友達にいいました。 きみちゃんのお話が良く分からなかったので、この黄色い服のお友達はきみちゃんにもう少し聞いてみることにしました。 次の3のうち、どれがいいと思いますか？
選択肢教示	物	人形は2つとも使うの？
	進行	お家はブロックでつくる？
	明確化修正	それって、何するの？

あいまい発話部

(4) あいまい発話問題

あいまい発話問題は不適切発話問題と同様に主人公がお友だちにごっこ遊びのイメージを伝達するエピソードと、3つの応答選択肢によって実施された。あいまい発話問題ではエピソード内容は主人公の提案が指示語（「それ」）によってあいまいに示され、選択肢は発話上のあいまいな箇所を明確化する発話修正の「明確化修正」と、不適切発話問題と同様の「物」「進行」の3つが用意されていた。

Table3にはあいまい発話問題の問題例が示されている。これより、「きみちゃん」（主人公）が「お友達」（黄色い服のお友達）に対し「それをしていることにしよう」とあいまいに提案している。そして、主人公（きみちゃん）のあいまいな提案への応答として、「お家はブロックでつくる？（進行）」「それって、何するの？（明確化修正）」「人形は2つとも使うの？（物）」の3つの応答選択肢を提示し、対象児が「明確化修正」（それって、何するの？）を選択するかどうかを検討した。

2. やりとり課題の課題構成と実施方法

(1) やりとり課題の課題構成

Table4にはやりとり課題の構成が示されている。ここから、やりとり課題は伝達情報が不足している場合に、不足情報を補う手がかり情報のある場合（推論情報条件）と、ない場合（確率情報条件）の2つの条件によって構成された。具体的な問題は、練習問題（2問）、推論情報条件である推論情報問題（2問）、確率情報条件である確率情報問題（2問）の3つの問題で構成されていた。また、やりとり課題はいずれの問題も指示語（「それ」「そこ」）によるあいまい発話を用いて対象児に動作を要求するが、2つの問題は指示対象の理解を補う手がかり情報の状態が異なっていた。具体的には、推論情報問題では指示対象を推論する手がかりが用意され、期待される回答に向かうように構成されていた。一方、確率情報問題は指示対象を特定できる手がかり情報は用意されていなかった。

Table 4 やりとり課題の構成

問題（問題数）	教示の特徴	手がかり	期待される回答の有無
練習問題 (2)	明示的な言葉	教示の指示	あり
推論情報問題 (2)	指示語によるあいまい情報	状況/知識	あり
確率情報問題 (2)	指示語によるあいまい情報	なし	なし

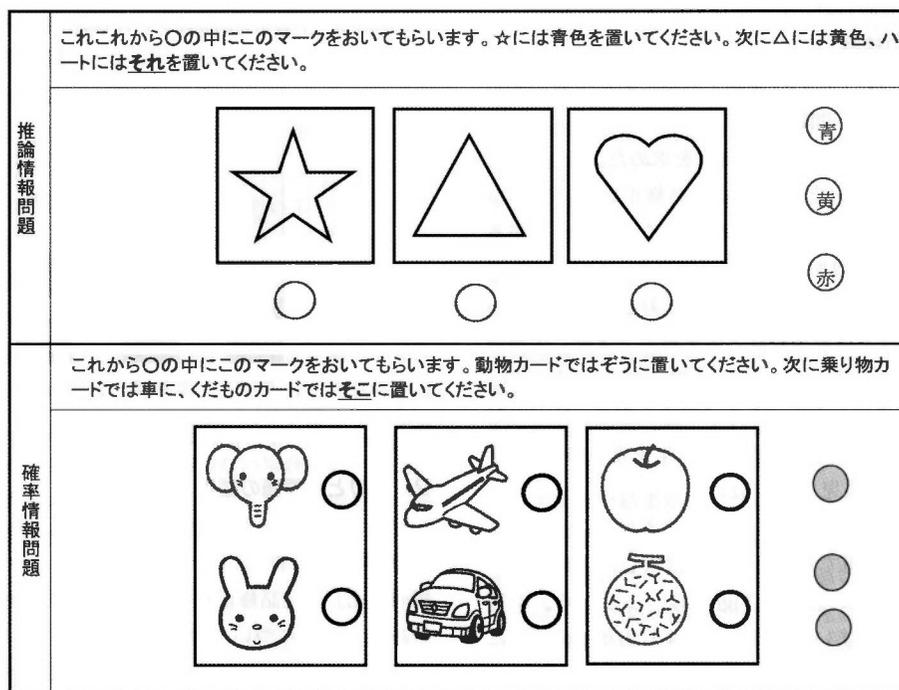


Figure 2 やりとり課題の例と刺激図

(2) 練習問題

練習問題は3歳の子どもが既に理解可能とされる文章（鈴木・福田, 1987）を用いて対象児にカードの選択を求めることで、課題の意図を対象児が理解し応答できるかどうかを確認するために行った。（例；「よしこさんはカサを買いました。赤い方を買いました。よしこさんが買った物はどれですか。」という指示に対し、「赤いカサ」のカードを選択するかどうかみた。）

この練習問題を通過しなかった者は、本課題を実施するには言語理解が不十分であると判断された。

(3) 推論情報問題と確率情報問題

Figure2にはやりとり課題の問題例および使用した図版の例を示している。上段が推論情報問題、下段が確率情報問題である。Figure2上段より、推論情報問題では、

対象児は教示に従いマークを動かしていくが、最後の教示（ハートにはそれを置いてください）ではマーク（青色）は1つしか残らないため「それ」の指示対象が「赤色」であることを推論できるようになっていた。

これに対し、Figure2下段の確率情報問題では、対象児は教示に従ってマークを動かしていくが、最後の教示（くだものカードではそこに置いてください）では「そこ」の指示対象の候補は「りんご」と「メロン」の2つが用意されており、幼児が明確化による発話修正をした場合に指示対象が伝えられるようになっていた。

結 果

選択課題、やりとり課題の練習問題のうち1問でも不適切な応答をした者は分析から除いた。除かれたデータは、主に選択課題において課題の意図に不適切な応答をしていた者であった。この理由は、PCによる課題実施を十分にできなかったものと思われた。なお、練習問題は3歳程度の言語理解を要する内容で構成されていたため、分析対象となった幼児は3歳以上の言語理解ができているものと判断した。

1. 選択課題の結果

選択課題については応答傾向をみるために不適切発話問題とあいまい発話問題の各2問（見立て／設定）を合わせ、各選択肢が選択された割合を求めた。その結果、不適切発話問題ではどの年齢も発話修正の応答である「言い直し修正」の選択割合が最も高く、年齢が上がるごとにその割合は増加していた（年少児；44.1%、年中児；59.8%、年長児；81.5%）。これに対して、あいまい発話問題における選択割合はどの年齢も「進行」の割合が最も高く（年少児；42.6%、年中児；42.2%、年長児；36.9%）、発話修正の応答である「明確化修正」はどの年齢においても割合が最も低かった（年少児；16.2%、年中児；20.6%、年長児；29.4%）。

次に、年齢ごとの発話修正の応答に着目し、それぞれの問題で2問中1問でも発話修正を選択した人数を年齢ごとにまとめた（Figure3、Figure4）。ここから、不適切発話問題、あいまい発話問題のいずれも年齢の増加にともない発話修正の応答をする割合は増加していた。そこで、発話修正による応答の年齢差を検討するために、年齢（3）×発話修正の応答のあり・なし（2）のカイ二乗検定を不適切発話問題とあいまい発話問題それぞれについて行った。その結果、不適切発話問題では年齢間に有意な差が認められた（ $\chi^2(2)=15.03, p<.01$ ）が、あいまい発話問題では有意な差は認められなかった（ $\chi^2(2)=3.95, ns$ ）。不適切発話問題の残差分析の結果では、「なし」の年少児の多さと年長児の少なさ、および「あり」の年少児の少なさと年長児の多さに1%水準の有意が認められた。

以上から、発話の不適切な箇所を見出し適切に修正する発話修正は年齢の増加にともない多くなり、年長児においてより実行されるようになると思われた。しかし、あいまい発話問題のように指示対象が不明確な場合には、それを明確化するような発話修正の実行は年齢間ではっきりとした違いは生じていなかった。むしろあいまいなままに展開される「進行」の選択肢が選ばれることが多かった。

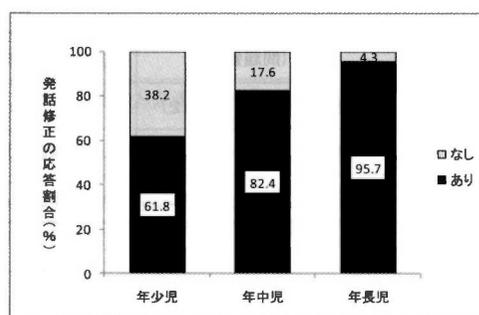


Figure 3 不適切発話問題における発話修正による応答

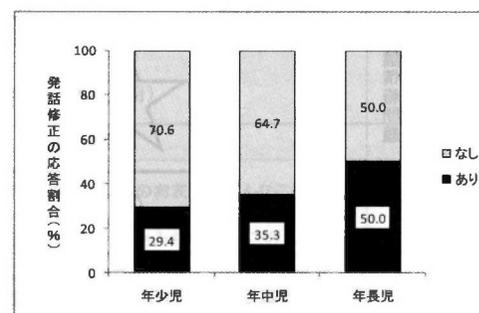


Figure 4 あいまい発話問題における発話修正による応答

2. やりとり課題の結果

推論情報問題と確率情報問題の幼児の応答は大きく「情報明確化」「推論」「その他」の3つに分けられた。「情報明確化」は発話修正が実行された応答であり、指示語のあいまいさについて検査者に「どこ?」「これ?」など明確化修正による質問がなされた応答である。これに対し「推論」は発話修正を実行することなしに独自の判断でなされた応答である。また、推論情報問題では手がかり情報と一致する回答がみられた場合に、確率情報問題では2つの選択肢のうちどちらか一方を回答した場合に推論したとみなした。「その他」は無反応や不適切な応答などが含まれていた。

推論情報問題において発話修正の実行である「情報明確化」によって応答された割合は年少児で最も低く、年齢が上がるごとにその割合は減少していた（年少児；25.0%、年中児；17.7%、年長児；3.3%）。これに対し「推論」の応答割合はいずれの年齢群も最も高く、その割合は年齢が上がるごとに増加し、年長児ではほとんどの対象児が「推論」による応答をしていた（年少児；55.9%、年中児；73.5%、年長児；91.3%）。これに対して、確率情報問題の応答割合では、発話修正の実行である「情報明確化」は年少児から年中児にかけて減少するのに対し（年少児；51.5%、年中児；29.4%、年長児；32.6%）、「推

論」が年少児から年中児にかけて増加していた（年少児；42.6%、年中児；63.7%、年長児；60.9%）。

次に、年齢ごとの発話修正の応答に着目し、それぞれの問題で2問中1問でも発話修正をした人数をまとめた（Figure5、Figure6）。ここから、推論情報問題、確率情報問題のいずれも発話修正の応答「あり」の割合は年齢の増加にともない減少していた。そこで、発話修正の応答の年齢による差を検討するために、年齢（3）×発話修正の応答のあり・なし（2）のカイ二乗検定を推論情報問題、確率情報問題それぞれについて行った。その結果、推論情報問題（ $\chi^2(2)=14.15, p<.01$ ）と確率情報問題（ $\chi^2(2)=5.42, p<.05$ ）のいずれにおいても有意差が認められた。さらに残差分析の結果、推論情報問題では「なし」の年少児の少なさと年長児の多さ、および「あり」の年少児の多さと年長児の少なさにおいて5%水準以下の有意が認められた。また、確率情報問題では「なし」の年少児の少なさと、「あり」の年少児の多さにおいて5%水準の有意が認められた。

これらの結果から、あいまい情報の不足を補う手がかり情報のある場合には、情報明確化といった発話修正は実行されず、その傾向は年齢の増加にともなって高くなると思われた。また、状況情報のない場合において発話修正を実行するのは年少児の傾向であり、年中児と年長児では発話修正を実行する者は少なかった。

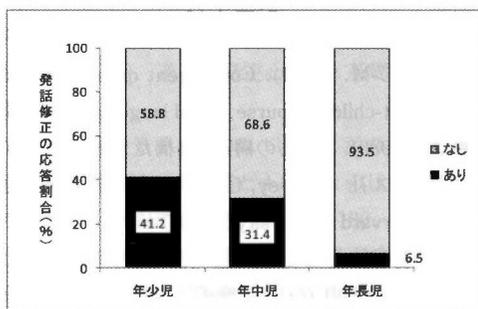


Figure 5 推論情報問題における発話修正による応答

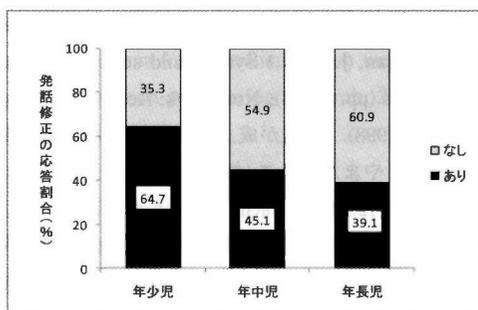


Figure 6 確率情報問題における発話修正による応答

考 察

本研究は、ごっこ遊びの展開に重要だと思われる発話修正に焦点をあて、3つの仮説を検証することを目的として選択課題とやりとり課題の2つの課題を行った。

まず、選択課題では年齢が高くなるほど発話修正による応答の割合が増加する（仮説1）との仮説を検証した。この検証にあたっては、対象児が不適切発話とあいまい発話に対し発話修正による応答の選択肢を選択した場合に、発話修正による応答をしたとみなし検討を行った。その結果、発話修正による応答の割合は不適切発話問題とあいまい発話問題とで異なっていた。すなわち、不適切な発話に対する発話修正による応答は年少児で少なく年長児で多かった。これに対して、あいまい発話問題における発話修正による応答は年齢間による違いは認められなかった。むしろ、全ての年齢において発話修正の「明確化修正」が選択される割合は「進行」や「物」が選択される割合に比べて低かった。これらのことから、仮説1は支持されなかったといえる。すなわち、先行発話の不備は全てが発話修正の対象とされるのではなく、不適切発話の対象とされ、あいまい発話は対象とされていないかった。

このような結果が生じた背景には、不適切発話とあいまい発話では相互交渉への影響が異なっていることが関連すると思われる。すなわち、不適切発話を修正しない場合は、その後の遊びは不適切な見立てや設定にもとづいて遊びが展開されることになる。そのため、不適切発話では発話修正が必要だったと思われる。これに対してあいまい発話の場合は、その発話がその後の展開に何らかの影響を及ぼすかどうかは明確ではない。本研究では話題をそのまま続ける応答の「進行」を選択する者が多かったことから、幼児は相手の発話があいまいな場合には、それを修正するのではなく問題が生じるまであいまいさを保留し相互交渉を継続するのではないかと考えられた。このように、幼児は先行発話の不備がその後の遊びの展開に及ぼす影響に応じて発話修正をするのではないかと考えられた。

次に、やりとり課題を通して、年齢が高くなるほど手がかり情報のある場合に発話修正は実行されず（仮説2）、手がかり情報のない場合に発話修正が実行される（仮説3）の2つの仮説について検証を行った。まず、手がかり情報のある推論情報問題における発話修正の応答では年少児の少なさと年長児の多さに有意な差が認められた。このことから、仮説2は支持されたといえる。すなわち、情報が不足していたとしても発話以外の手がかり

り情報があれば、幼児はそれを参照して伝達内容を理解すると思われる。そして、このような発話以外の情報を用いる力が年少児から既にみられていることから、年少児であっても幼児は先行発話への単なる応答ではなく文脈にもとづいた相互交渉をしていることがうかがえた。

これに対して手がかり情報がない場合に発話修正が実行され、年齢の増加にともない実行傾向は高くなるという仮説3は支持されなかった。すなわち、発話以外の手がかり情報のない確率情報問題における発話修正の実行は年少児で有意に多かった。さらにこの問題における対象児の応答は「情報明確化」よりも「推論」の割合の方が多かった。このような結果となった理由として、確率情報問題の課題構成が影響していたのではなかと思われた。すなわち、本研究の確率情報問題の構成は最後にマークを置くことができる場所は2つしかなかった。対象児は一方の置きたいところに置き、それがもし間違いであると調査者から指摘されれば移動させることもできた。ここから、確率情報問題の指示語のあいまいさは相互交渉上の決定的な問題ではなく、相互交渉の進行を通じてあいまいな情報を得ることができる構造であった。このような課題の特徴が、年長児が発話修正をしないことに影響を及ぼしたのではないかと思われた。

これらの考察からごっこ遊びの展開と発話修正との関連について検討すると、ごっこ遊びにおける発話修正には2つの作用があると考えられる。すなわち、発話修正の実行は相手のプランを明示化することができる一方でこれまで継続していた相互交渉に変化を与えてしまう。このことについて鈴木(2008)は、どのような発話も修復(修正)の対象となりうるが、実際には特定の発話修復(修正)のターゲットとなることで初めて、そこに何らかのトラブルがあることが顕在化されるとしている。すなわち、ごっこ遊びにおいて発話修正をすることは、相手のプランに問題点があることを伝達することである。さらに、発話修正はコミュニケーションのためのコミュニケーションであるため、発話修正をすることでそれまで進行していた遊びの相互交渉は中断され、新たな話題が開始される。したがって、あいまいさといった今後の遊びの展開に大きな影響を及ぼさないようなことについては進行している遊びが優先され、幼児は発話修正をせずに相互交渉を継続するのではないかと思われる。通常、相互交渉においてそのスムーズな流れを維持するためには、聞き手はあいまいな発話からおおよその状況を想定することで、あいまいな語やはっきりしないままに提示されている発話の意味を引き出そうとする(Thomas,1998)。本研究のあいまい発話問題において「進

行」を選択する割合が高かったことから、ごっこ遊びにおいても幼児は相互交渉を継続しながら不足している情報を引き出すのではないかと思われた。

これに対し発話修正が実行されるのは、先行発話の不備がその後の遊びの展開に大きな影響を及ぼす場合であると考えられる。本研究で幼児が発話修正による応答が望ましいとしたのは不適切発話問題であった。この問題の不適切箇所は「赤いボールがバナナになる」「お母さんが2人いる」といった社会・文化的に不適切なものである。この「お母さんが2人いる」という設定は、年少児では容易に受け入れられるが、年長児では受け入れられないことが報告されている(秦野,1998)。このことから、年長児ほど社会・文化的知識との矛盾が生じた場合にそれを解消するために発話修正が実行されると思われた。

以上のことから、ごっこ遊びの展開において発話修正は先行発話の不備を修正することが重要なのではなく、その後の遊びの展開との関連に応じてなされることが重要であると思われた。すなわち、ごっこ遊びのエピソードを社会・文化的知識と整合させるときには発話修正をし、相互交渉の流れを継続し遊びを続行するときには発話修正をしないことで遊びが展開されると考えられる。したがって、幼児はこの2つの方法を遊びの状況に応じて使い分けられるように発達することが、ごっこ遊びの展開にとって重要な相互交渉の発達であると思われた。

引用文献

- Gallagher, T. M. (1981). Contingent query sequences within adult-child discourse. *Child language*, 8, 51-62.
- Garvey, G. (1980). *ごっこの構造* (高橋たまき, 訳). 東京:サイエンス社 (Garvey, G. (1977). *Play*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- Garvey, C. (1987). *子どもの会話: おしゃべりにみるこころの世界* (柏木恵子・日笠摩子, 訳). 東京:サイエンス社. (Garvey, G. (1984). *Children's talk*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In Cole, P. & Morgan, J. (Eds.) *Syntax and semantics*, Vol.3: *Speech acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- 秦野悦子. (1998). 会話が成立するときしなないとき. 秦野悦子・やまだようこ(編), *コミュニケーションという謎* (pp.129-150). 京都: ミネルヴァ書房.
- 上山真知子. (1991). *ごっこ遊びの会話*. 山崎愛世・心理科学研究会(編), *遊びの発達心理学: 保育実践と発達研究をむすぶ* (pp86-111). 東京: 萌文社.
- Kinoshita, Y., Saito, K., & Matsunaga, A. (1993).

付 記

Developmental change in antecedents and outcomes of peer conflict among preschool children: A longitudinal study. *Japanese psychological research*, 35, 57-69.

倉持清美. (1992). 幼稚園の中のものめぐり子ども同士のいざこざ：いざこざで使用される方略と子ども同士の関係. *発達心理学研究*, 3, 1-8.

岡崎弘奈. (2008). 使用方略間の関連性よりみた5歳児のいざこざの特徴. *滋賀大学大学院教育学研究科論文集*, 11, 93-103.

Piaget, J. (1967). *遊びの心理学* (大伴茂, 訳). 名古屋：黎明書房. (Piaget, J. (1945). *La formation du symbole chez l'enfant.*)

佐藤公治. (1999). *対話の中の学びと成長*. 東京：金子書房.

斉藤こずゑ. (1986). 仲間関係. 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編), *子ども時代を豊かに：新しい保育心理学* (pp.59-111). 東京：学文社.

Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361-382.

鈴木佳奈. (2008). 「何かが欠けている発話」に対する他者開始修復：会話の事例から「文法項の省略」を再考する. *社会言語科学*, 10, 70-82

鈴木敏昭・福田香苗. (1987). 文のあいまいさの意識の発達：対象指示表現に関して. *教育心理学研究*, 35, 17-25.

高橋たまき. (1996). *遊びの再考*. 高橋たまき・中沢和子・森上史郎 (編), *遊びの発達心理学：基礎編* (pp.1-20). 東京：培風館.

田中洋・阿南寿美子. (2008). いざこざの発生と解決過程の発達の検討：3歳児と4歳児との比較. *大分大学教育福祉科学部研究紀要*, 30, 171-180.

Thomas, J. A. (1998). *語用論入門* (浅羽亮一監訳). 東京：研究社出版. (Thomas, J. A. (1995). *Meaning in interaction : an introduction to pragmatics*. New York : Longman)

Tomasello, M., Farrar, M. J., & Dines, J. (1984). Children's speech revisions for a familiar and an unfamiliar adult. *Journal of speech and hearing research*, 27, 359-363. 参考文献

本論文はその一部を下記の通り、日本発達心理学会第18回大会およびISSBD 20th Biennial Meetingにおいて発表している。

・飯島典子. (2007). 幼児のあいまい情報に対する明確化要求の発達(1). *日本発達心理学会第18回大会発表論文集*, 664.

・Noriko Iijima & Kazuo Hongo. (2008). Development of Children's Correction to Ambiguous Utterances in Pretend Play Situation. *The International Society for the Study of Behavioural Development (ISSBD)*, P132, Wuerzburg, Germany.

謝 辞

実験に快くご協力いただきました保育園、幼稚園の園児および先生方に深く感謝申し上げます。また、本論文の作成にあたり、丁寧なご指導を賜りました東北大学大学院教育学研究科本郷一夫先生に厚くお礼申し上げます。

幼児の不適切発話とあいまい発話に対する発話修正の発達

— ごっこ遊びにおける相互交渉に着目して —

本研究はごっこ遊びの展開に重要だと思われる幼児の発話修正の発達を明らかにすることを目的とし、年少児34名、年中児51名、年長児46名、合計131名(男児69名、女児62名)を対象に選択課題とやりとり課題を行った。選択課題では、ごっこ遊びエピソードに不適切発話が含まれているものと、指示語によるあいまい発話が含まれているものを幼児に提示し、幼児はそれぞれの発話にどのように応答することが適切だと思うのかを選択肢から選ぶように求めた。また、やりとり課題では実験者が幼児に指示対象の不明確な指示語(「それ」「そこ」)を用いて伝達した場合の幼児の反応タイプを検討した。その結果、選択課題において年齢の増加にともなって不適切発話に対して発話修正の応答を選択する傾向が高くなった。一方、あいまい発話に対し発話修正の応答を選択する傾向は少なく、年齢による違いもみられなかった。またやりとり課題において、状況に手がかりのある場合には指示対象が不明確な伝達であっても幼児は発話修正ではなく推論によって応答する傾向にあり、その傾向は年齢の増加にともなって高くなった。これらの結果から、幼児は先行発話に不備がある場合に常に発話修正をするわけではなく、先行発話の不備が何かを推論出来る場合や、相互交渉の流れを維持することが優先される場合には発話修正を行わないと考えられた。一方、発話がごっこ遊びのエピソードとして社会・文化的知識に合わない不適切な場合には、発話とエピソードを整合させるために不適切発話の修正を行うと考えられた。

キーワード：ごっこ遊び、遊びの展開、発話修正、不適切発話、あいまい発話

Development of Children's Correction to Inappropriate Utterance and Ambiguous Utterance: Focus on Interaction in the Pretend Play.

The purpose of the present study was to clarify the development of children's correction to inappropriate utterances and ambiguous utterances in the pretend play situation. Subjects were 131 children (ages = 3 to 6 years, 69 boys and 62 girls). There were two tasks which had two conditions respectively. In the selection task, children heard the child-child conversation in the pretend-play situation, and they were asked to choose the most appropriate response as one child response from three alternatives. There were some inappropriate utterances and ambiguous utterances in the child-child conversation. In the interaction task, children were asked to response to the experimenter's direction with a demonstrative pronoun.

The main results were as follows:

- (1) In the selection task (Inappropriate Utterance). The selection rate of "the correction response" increased with age.
- (2) In the selection task (Ambiguous Utterance), many children did not necessarily choose "the correction response".
The selection rate of "the correction response" did not change with age.
- (3) In the interaction task (Reasoning Condition of Ambiguous Utterance), almost all children answered by the reasoning.
The rate of the response by the reasoning increased with age.

It was suggested that the children's ability to correct inappropriate utterances developed with age. However, children did not always correct ambiguous utterances. It was because the children knew that a smooth flow was the most important in conversation. Children corrected inappropriate utterances in order to match the inappropriate utterance with the social and cultural knowledge in episodes of pretend play.

key words:pretend play, development of play, correction to utterance, inappropriate utterance, ambiguous utterance